

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	アジアの発掘口琴チェックリスト(5)：湾曲状の口琴(3)
Title in another language	Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (5) - Bow-shaped Harps (3)
Author(s)	直川礼緒 (TADAGAWA Leo)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 10, p. 23-37
Date of issue	2021-03-30
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	http://www.minken1975.com/publication/IE_B10202003.pdf

アジアの発掘口琴チェックリスト(5): 湾曲状の口琴(3)

Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist(5) - Bow-shaped Harps(3)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれたのだろうか。これまで「アジアの発掘口琴チェックリスト」では、4回に渡りアジアとその周辺地域で発掘された口琴の確認を行ってきた。

本稿では、これまでの情報を簡単に整理した後、続編として千葉県木更津市の鉄製口琴の追加情報からはじめ、ロシア連邦ケメロヴォ州出土の紀元後7-8世紀の口琴と、バシコルトスタン、アルタイ、サハ、などのロシア連邦のテュルク語系の民族共和国に点在する、17世紀以降と考えられる湾曲状の金属口琴を検証する。

また、地理的にはアジアに位置するヤマロ-ネネツ自治管区で発掘された、ヨーロッパ・ロシアからもたらされた湾曲状の口琴も検証し、さらに、中国陝西省長安の未確認の口琴や、ブリヤート共和国内の遺跡から発掘されたという情報のみが知られる、詳細不明の口琴についても触れる。

キーワード: 口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、
北方アジア Northern Asia

2016年に第一部を始めた本稿「アジアの発掘口琴チェックリスト」では、これまで、薄板状の口琴83例⁹⁵、湾曲状の口琴10例を検討してきた。その中には、詳細の記述を行っていないもの、詳細が未発表のもの、詳細不明なものなどが含まれており、更なる調査の継続が不可欠である。また、連載中に新たに発見や報告がなされた例や、詳細情報が新たに判明した例なども少なくなく、これまでに振ってきた各口琴の仮の通し番号は、いずれ再検討を要する。

ここで、既に検討した合計93の例を一旦整理する意味で、おおよその年代順に並べてみたい。それに先立ち、まずロシア連邦バシコルトスタン共和国 [16] やカマ川流域 [17~51] (直川 2017)、同オムスク州 [82, 83] (直川 2020a) という、ヨーロッパ東端からアジア西端にかけての地域で発掘された、弁を振動させるための引き紐の穴のない、弾くタイプと考えられる薄板状の口琴38例は、一定の地域性を持つひとつの大きなクラスターを形成しているものの、同地域での民族例としての伝承が全く確認されておらず、改めて考察の必要があると思われるため、別扱いとする。

この一群を除いた出土例を、薄板状・湾曲状のそれぞれについて、誤差が含まれていることは承知の上で時系列順に並べると、次のようになる。なお、薄板状の口琴は、すべて紐で引いて弁を振動させるタイプであり、また、最も年代の新しい [10] は、振動弁その

ものに引き紐をつける穴が開いている（[11]は未確認）が、それ以外はすべて枠に引き紐をつける穴が開いている。

○薄板状の口琴（骨製、竹製も？⁹⁶）

1. 紀元前 22 ～ 11 世紀 中国遼寧省朝陽市 2 例 [12, 13]（直川 2017）
2. 紀元前 20 世紀 中国陝西省榆林市 23 例 [57 ～ 79]（直川 2020a）
3. 紀元前 19 世紀 中国山西省臨汾市 1 例 [80]（同）
4. 紀元前 8 ～ 4 世紀⁹⁷ 中国内蒙古自治区赤峰市 2 例 [01, 81]（直川 2016, 2020a）
5. 紀元前 8 ～ 5 世紀 中国北京市延慶区 4 例 [02 ～ 05]（直川 2016）
6. 紀元前 6 世紀 中国陝西省宝鷄市 口琴ケース？ 1 例 [14]（直川 2017）
7. 紀元前 3 ～ 1 世紀 モンゴル トゥヴ県 1 例 [06]（直川 2016）
8. 紀元後 2 世紀 ロシア連邦トゥヴァ共和国 1 例 [07]（同）
9. 紀元後 3 ～ 5 世紀 ロシア連邦アルタイ共和国 5 例 [52 ～ 56]（直川 2018）
10. 紀元後 4 ～ 5 世紀 ロシア連邦ハカス共和国 2 例 [08, 09]（直川 2016）
11. 紀元後 18 ～ 19 世紀 ロシア連邦ヤマロ - ネネツ自治管区 2 例 [10, 11]⁹⁸（同）

○湾曲状の口琴（金属製）

1. 紀元後 5 ～ 6 世紀 ロシア連邦沿海地方 1 例 [101]（直川 2018）
2. 紀元後 5 ～ 11 世紀 中国黒竜江省鶴崗市 1 例 [106]（直川 2018, 2020a）
3. 紀元後 7 ～ 8 世紀 ロシア連邦沿海地方 1 例 [104]（同）
4. 紀元後 9 世紀 同 1 例 [102]（直川 2018）
5. 紀元後 9 ～ 11 世紀 同 1 例 [103]（同）
6. 紀元後 9 世紀末 日本千葉県木更津市 1 例 [110]（直川 2020a）
7. 紀元後 10 世紀初頭 日本埼玉県羽生市 1 例 [107]（直川 2018）
8. 紀元後 10 世紀初頭 日本埼玉県さいたま市 2 例 [108, 109]（同）
9. 紀元後 11 ～ 12 世紀 ロシア連邦沿海地方 1 例 [105]（同）

20a. 日本千葉県 Chiba Prefecture, Japan [110]（補遺）

前稿（直川 2020a）で紹介した、木更津市花山遺跡出土の湾曲状の鉄製の口琴であるが、「重要な考古遺物であること」が認められ、2019 年度中に保存処理が行われた（酒巻 2020）。これに伴い新たに発行された報告書（同上）では、「1. 報告にいたる経緯、2. 遺跡と遺構の概要、3. 鉄製口琴、4. 保存処理の成果」の各項目が簡潔にまとめられている。

その中で、調査時の記録等を再確認した結果として、発掘調査直後の遺跡全体の報告書（平野 編 1988）では「28 号住居址の北側の竈のそば」としていた口琴の出土地点を、同住居を切って構築された土坑の存在を認めて「1 号土坑」とし、その南東部と改めて確定している。これは、28 号住居址の南東の隅よりも、少々外側（屋外）になる。

9 世紀後半という口琴の年代も、同じ土坑内から出土した土師器坏より推定したことが明記されている（28 号住居は、8 世紀前半）。

さらに、口琴の採寸が、全長 148mm、最大幅 49mm、高さ 11mm と記されている⁹⁹ ので、前稿の筆者による採寸（直川 2020a: 51）は取り下げ、公式な数字に統一したい。また、保存処理前の重量（破片を含む）も 65.72g と表記されている。

保存処理後の実測図や写真、処理前の X 線画像、口琴の出土地点がはっきりとわかる出土状況写真など、充実した図版も公開されている。

新たに判明した重要な情報として、前稿で振動弁の可能性を指摘した細長い遺物について、保存処理の過程での細部観察により、「下端より約 9mm の位置に『関部』を想定し、鉄鏃の可能性が高いと判断した」（同 p.24）とある。たまたま同じケースに保存されていた鉄製品であったため、口琴の振動弁の可能性を疑ったのであるが、鏃という、口琴とは直接関係のないものであると判明したわけである。

筆者は、保存処理直後の当該口琴を実見する機会を 2020 年 2 月 5 日に得たが、鱗の様に剥がれていた数多くの錆の破片をもとの位置に戻し、痩せていた腕部がしっかりと質量を持った、断面が正方形に近い角材であることがはっきりわかる形に復元されていた¹⁰⁰。

21. ロシア連邦ケメロヴォ州 Kemerovo Oblast, Russia [111]

ケメロヴォ州は、南シベリアに位置するロシアの行政区で、東にハカス共和国、南にアルタイ共和国といった、これまで薄板状の口琴の出土地として名前の出てきた（直川 2016, 2018）民族共和国と接している。今でこそ、ロシア系などのあとからやって来た住民が大多数を占めるが、もともとはショル（ショール）人という、テュルク語系の民族の本拠地である。

その最大の都市ノヴォクズネツク（州都はケメロヴォ）にほど近い、エサウルスキイ墳墓群から紀元後 7～8 世紀の湾曲状の鉄製口琴 [111] が一例出土している（fig. 63, 64）¹⁰¹。

報告書（Кузнецов 2005）によれば、断面が四角形の鉄棒を折り曲げることによって杵が形成されており、中央に鉄（鋼だろうか？）の薄い振動弁と、一定の形状に形作られた「共鳴板」を持つとのこと。採寸の記載は見当たらず、実測図のスケールをもとに測ってみると、全長約 94mm、杵の先端から環状部底部までは約 75mm、最大幅約 14mm である。

杵の形状は、環状部の無いヘアピン型、あるいは細長い等脚台形に近い形である。杵の太さ自体は、先端に行くに従って細くなっている。杵の底部には、デザイン性のある薄い板状の部品が取り付けられているように見え

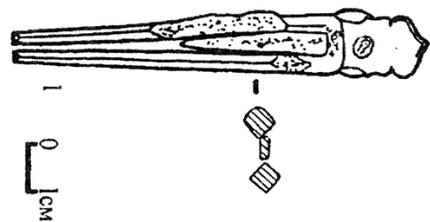


fig. 63 ロシア連邦ケメロヴォ州エサウルスキイ墳墓群出土の口琴 [111]。（展示状態は、環状部を上にした縦位置）写真提供：ベスクローヴヌイ

fig. 64 同上。[111] 実測図。（オリジナルは、環状部を上にした縦位置）クズネツォフ 2005 より

る。これがどのように取り付けられているのか（あるいは一体のものなのか）は、不明である。部品の中央枠寄りに見られる円形のものが、取り付け方法の手掛かりなのかも知れない。振動部の先端は失われている。

よく似た大きさと形状の、環状部の膨らみがない口琴は、すぐ近くのトゥヴァ共和国で現在も盛んに演奏されており、それらの直接的な祖先に当たると考えて間違いないだろう。枠の底部の板状の部品が取り付けられている目的に関しては、クズネツォフは「共鳴板」と考えているようだが、このような仕掛けで音が大きくなるとは考えにくい。筆者は、単なる装飾、または演奏時に楽器を持ち易くするための「持ち手」ではないかと考える。実際、現行のトゥヴァの湾曲状の口琴の場合、特に鉄板から切り出すことによって枠を成形する（棒を曲げることによるのではなく）タイプの口琴では、環状部底部に相当する部分を長く残し、楽器を安定して保持できるようにしてある。

問題は、時代的にほぼ前後して、極東地域（ロシア沿海地方、中国黒竜江省、日本の千葉県と埼玉県）に集中的に現われる、一群の口琴との関連だろう。形状的には、日本のもののような、全長 120mm を超える大型で、環状部が円形あるいは雫型のものとは異なり、ヘアピン型の古い時代の大陸側の出土例に近いようなイメージではある。しかしながら、現時点では、極東地域と南シベリアを繋ぐ地点、特に南シベリアでは同時代の他の発掘品が見当たらず、遠く離れた両地域の口琴の関連性を論じるには材料が足りない、といわざるを得ない。

22. ロシア連邦バシコルトスタン共和国 2 Republic of Bashkortostan, Russia 2 [112～119]

弾くタイプの薄板状の金属製の口琴 [16] が発掘されている、ウラル山脈を跨ぐかたちでアジアとヨーロッパの境界線上に位置するバシコルトスタン共和国では、小型の湾曲状の金属口琴の発掘例が複数見られる。

写真 (fig. 65) の 4 例は、同共和国中央部のガフリイスキイ地区在住のアマチュア考古学愛好家 G 氏によって発見されたもの（個人蔵）で、2017 年 6 月 10 日に同地を訪れた際に見せていただいた。

一番上の [112] は中でも最も小型で、全長約 31mm、最大幅約 17mm の鉄製。フラスコのような、丸みを帯びた三角形の膨らみをもつ環状部底部では、素材の断面は長方形（高さ約 6mm、厚さ約 2mm）となっており、その「きし麵」のような形状の素材を縦に使っているのが特徴的である。曲げやすさを優先した形状であろうか。振動弁はカシメによる取り付けであると考えられるが、失われている。

[113] は、全長約 41mm、最大幅約 17mm、高さ約 6mm で、おそらく銅製。環状部はゆったりとした雫型で、側面から観察すると、腕部のエッジと、環状部底部の接続部の高さを一致させるために、両者を少々曲げる、いわゆる「への字型」¹⁰² が明瞭に観察される。やはり枠環状部での素材の断面は縦長の長方形。振動弁は、ごく浅い位置にカシメて取り付けられていたと考えられるホゾ穴が見られるが、振動弁は失われている。

[114] は、円形に近い環状部を持ち、一見全体的なフォルムが大宮氷川神社東遺跡や

羽生の屋敷裏遺跡で出土した口琴と非常によく似ているが、大きさが全く異なる。全長約49mm、最大幅約24mm、高さ約6mmと、極端に小型である。振動弁は折れてほとんど失われているが、環状部底部の取り付け部付近に7mmほどの長さが残存している。

形態的に日本の発掘口琴と似ている [114] が、相違点はサイズの他にもある。それが、環状部での素材の成形の仕方である。日本や沿海地方の口琴の枠は、稜線が全体に通っており、環状部でも稜線の位置は変わらない。これに対し、[112～115]の4例は、環状部において、断面が長方形となるように形づくられ、しかも稜線の方向は45度変化している。例えば、大宮の口琴の枠の断面が、腕部でも環状部でも◆であるのに対し、バシコルトスタンの4例は、腕部で◆、環状部では■となっているのである。このような、環状部における縦長の長方形の断面をもつ素材は、弁の取り付けに関しては、接触面が少なくなるため不利であるが、環状部を曲げる作業は容易になると考えられる。

[115]は、[114]に似ているが、もっと華奢である。全長約51mm、最大幅約20mm、高さ約6mmで、[114]と同様に弁は折れて失われているが、環状部底部に7mmほどが残っている。枠の腕部の先端の断面の四角形の一辺の長さは、1mmあるかないか、というほどの繊細な作りとなっている。

どれも、350～400年前、すなわち16～17世紀のものと考えられるとの話であった。川の浅瀬などで見つかるとのことで、一緒に発見されるものとして、全長70～75mm程度の鉄鎌も複数本見せていただいた（木更津の口琴も、鉄鎌と関連して発見されており、その共通性が興味深い）。

バシコルトスタンでは、湾曲状の金属製の口琴も、木製の薄板状の紐口琴（fig. 68 参照）も、それぞれ伝統が引き継がれている。とはいえ、これほど小さな湾曲型の口琴は、現在のバシコルトスタンのバシコルト（バシキール）人（テュルク語系）の間では見かけられず、また世界を見渡してもほとんど見られない、非常に稀な例だということができる。この小さく繊細な口琴は、どのような理由で作られたのだろうか。

同じようなサイズと形状の小型の口琴は、この地域では比較的ポピュラーなものの様で、同じくガフリスキイ地区の別の村に住む口琴愛好家のS氏のコレクション中に3本を見かけた。写真（fig. 66）は、[112～115]と並べて置いたもので、左端を[116]、右から3



fig. 65 ロシア連邦バシコルトスタン共和国ガフリスキイ地区で発見された口琴。上から、[112] [113] [114] [115]。2017. 6. 10 筆者撮影



fig. 66 同上。左から、[116]、既出の [114] [115] [113]、[117]、既出の [112]、[118]。2017. 6. 11 筆者撮影

番目を [117]、右端を [118] とする。

[116] は鉄製で、全長約 53mm、最大幅約 22mm、高さ約 7mm、弁は失われている。杵の環状部での素材の断面は、[112～115]と同様の縦長の長方形。知人から譲り受けたもの、とのこと。

[117] は銅あるいは青銅製で、全長約 39mm、最大幅約 18mm、高さ約 5mm、弁は失われている。他のバシコルトスタンの例と異なる点が、杵の稜線が全体に通っている点である。野菜畑で発見したようだ。

[118] は、全長約 34mm、最大幅約 18mm、高さ約 5mm (fig. 67)。振動弁は、先端の直角部分まで残っている。白錆が出ており、素材はアルミニウム合金か。杵の断面のサイズが一様に見えることから、鍛造ではなく、工業製品の角材を利用して作られている、比較的新しいものであるように思われた。しかしながら、バシコルトスタンの現行の民族例にはこれほどの小ささのものは全く見られず、ある程度の古さはあるように感じられる。これも野菜畑で発見したとのこと。

S氏によれば、これらの3点の口琴は、共和国北東部のメチェトリンスキイ地区の行政中心地ボリシェウスチイキンスコエにある、ザグレッチーノフ記念口琴博物館¹⁰³に寄贈する予定とのことであった。

なお、同博物館には、2017年6月8日の開館時点で、別の小型の発掘口琴が1例 [119] 展示されていた (fig. 68)。開館式の慌ただしさの中で撮影した写真なので、ピントも合っておらず、また発掘地・サイズを初め詳細情報も確認する余裕がなかったが、バシコルトスタンの一連の小型の口琴の系譜に連なる遺物であることは間違いなさそうである。

23. ロシア連邦アルタイ共和国 2 Altai Republic, Russia 2 [120]

2017年に骨製の薄板状の口琴およびその製作途中段階と考えられる遺物が合計5例 [52～56] 発



fig. 67 [118] の「裏面」(振動弁が直角に曲げられている側と反対側)。振動弁が杵にカシメて取り付けられている様子がわかる。2017. 6. 11 筆者撮影



fig. 68 ロシア連邦バシコルトスタン共和国で発見された口琴 [119]。ザグレッチーノフ記念口琴博物館の展示。奥の3本は、木製の薄板状の紐口琴の現行の民族例。2017. 6. 8 筆者撮影



fig. 69 ロシア連邦アルタイ共和国コシ-アガチ地区エランガシ川付近で出土の口琴 [120]。(この写真は、180度回転させて環状部を右にもってくることは敢えてしていない。) 2002. 10. 7 筆者撮影

掘された（直川 2018）南シベリアのアルタイ共和国では、金属製の湾曲状の口琴 [120] の出土が一例見られる（fig. 69）。共和国最南部、モンゴルと国境を接するコシ-アガチ地区のエランガシ川付近で発見された。

この口琴を発掘した、ロシア科学アカデミーシベリア支部のクバリョーフ教授に、2002年ノヴォシビルスク滞在の際にお目にかかり、実物を見せていただき、お話を伺うことが出来た¹⁰⁴。

口琴を発掘したのは、1968年。同教授がゴルノ-アルタイスクの大学を卒業したばかりで、まだアマチュアの考古学愛好家のころであった。紀元後19世紀と考えられるテレングイト人（テュルク語系。アルタイ人の中の一民族集団）の女性の墓から出土、遺体の左側の小さなポシェットの中に入っていたとのことである。

小形で、筆者の採寸では全長約47mm、最大幅約10mm。環状部の膨らみのないヘアピン型で、全面に緑青がついていることから、銅または青銅製であると考えられる。振動弁は失われており、枠の環状部底部の、弁の接続部には、赤錆が残っている。

ブーツ型の、蓋つき木製ケースに納められていることは特筆すべきで、靴底部分の穴には、振動弁の先端が錆び付いたまま残っている（取り出すことは出来ない）。ケースの全長は約68mm、厚さ（最大幅）約15mm、靴底部の長さ約45mmである。

このような、ブーツ型のケースは、隣国トゥヴァ共和国の現行の湾曲状の金属口琴デミル-ホムスのケースとして、非常にポピュラーなものである（直川 2005: 72-79）。

24. ロシア連邦サハ共和国 Sakha Republic (Yakutia), Russia [121～126]

東シベリアのサハ共和国は、今では鉄製の口琴ホムスを国民楽器とするほど、世界で一番口琴の盛んな地域である。しかしながら、その起源を裏付ける考古学的な遺物は、あまり見ることができない。テュルク語系のサハ人は、もともとバイカル湖周辺に住んでいたが、モンゴルの南からの圧迫により、12～13世紀にかけていくつかの集団となって波状的に北に移動し、現在の居地に落ち着き、民族的なアイデンティティを形成したとされる。鉄を扱う集団として知られるサハ人が、古来湾曲状の口琴を作っていたのであれば、バイカル湖周辺から現在のサハ共和国にかけての地帯に、様々な年代のものがもっと発掘されてもよさそうなものであるが。

サハにおける口琴の発掘例としては、共和国中西部のヴィリュイスキイ地区¹⁰⁵の行政中心地ヴィリュイスクの口琴博物館に展示されている、2例 [121, 122] をまず挙げる事ができる（fig. 70）。展示解説などは無く、学芸員に尋ねてもはっきりしたことはわから



fig. 70 ロシア連邦サハ共和国ヴィリュイスク地区ヴィリュイ川岸出土の口琴。上から、[121][122]。（展示状態は、環状部を下にした縦位置）2009. 6. 30 筆者撮影

ない様子であったが、国際口琴センター代表のイヴァン アレクセイエフによれば、ヴィリュイ川の岸辺で発掘されたもので、年代は不明。古くても100～200年程度以上遡ることはできないのではないかと、いうことであった（直川 2012）。

目測では、現代の一般的なホムスのサイズである全長95～100mmよりは小さく見えた。おそらく全長90mm程度であろうか。2本の大きさは、少々異なっており、[122]の方がわずかに大きい。特徴的なのは、杵の稜線が全体に通っていること（どこで切っても断面が◆）。現行のホムスでは、杵の環状部では断面が■（少々扁平な長方形）となっている。これは、振動弁の安定した固定のための重要な改良点であると考えられる。共和国の首都ヤクーツクにある世界民族口琴博物館にも、いくつか稜線の通った口琴が所蔵・展示されており、これらは「古い」口琴であるとするのが一般的な認識である。

その意味において、ヤクーツクからそれほど遠くない、トゥイマダ盆地のユスハトイン付近の、ウーラーヒィという氏族の居住地跡で2009年に発見されたとされる（Аржаков 2014: 24）口琴[123]は、「新しい」タイプの口琴であるということが出来る（fig. 71）。それは、環状部の断面が■の状態に成型されているからである。また、全体の厚さ／太さの均一性から、工業製品の丸棒を素材としている感じが感じられる¹⁰⁶。アルジャコフによれば、環状部の内径24mm、外径33mm、環状部の杵素材の幅5mm、腕部の長さ55mm、腕部での杵素材の幅4.5mmとされている。全長の記載はないが、88mmということになるだろう。すぐ近くで、1869年発行の硬貨が見つかったことから、同時代のものと考えられるとのこと。比較的幅のある振動弁の根元が、杵に付いた状態で残っている。どのような力が加わったのかは不明だが、2本の腕が交差している。

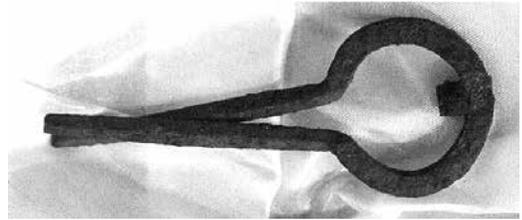


fig. 71 同ヤクーツク近郊ユスハトインで発見された口琴 [123]。（オリジナル図版は、環状部が左側に位置した状態）アルジャコフ 2014 より



fig. 72 サハ共和国の「19～20世紀の口琴」。左から、既出の [123] と、[124][125]。2015. 12. 6 筆者撮影

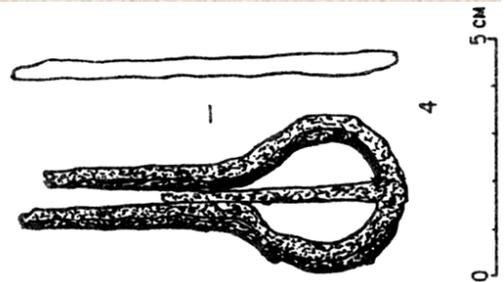


fig. 73 サハ共和国スレドネコリムスク地区アラゼヤ岩出土の口琴 [126]。（展示状態は、環状部を下にした縦位置）2003. 8. 11 筆者撮影

fig. 74 同上。[126] 実測図。（オリジナル図版は、環状部を下にした縦位置）アレクセイエフ 1996 より

この口琴は、サハにおいて、稜線の通った環状部の製作から、の状態に形作るようになった変化が、いつ頃起こったのかを探る、ひとつの大きな手掛かりではあるだろう。現在ヤクーツクの口琴博物館に寄贈され、「19～20世紀の古いサハのホムス」という説明と共に展示されている (fig. 72 上段左)。同じ棚には、他にもいくつかの「19～20世紀の古いサハのホムス」が展示されており、そのうちの少なくとも二例 (fig. 72 上段中央、右) は発掘されたもののように感じられる (ただし、[123]と同様、発掘品であることを明示した解説はない) ので、本稿では [124,125] の番号を与えるに留め、いずれ詳細を調査したい¹⁰⁷。注目すべき点は、18世紀以前のサハのホムスについては、口琴博物館には所蔵・展示がない、ということだろう。

サハ共和国内で発掘された17世紀のものとしてされる口琴は、ヤクーツク市内の北東連邦大学 (旧ヤクーツク大学) 考古学博物館 (マンモス博物館) の展示中に、「ホムス」という展示解説板とともに、湾曲状の鉄製の出土口琴 [126] が展示されている (fig. 73)。共和国の東端にあるスレドネコリムスク地区のアラゼヤ川下流域にある、ロシア人の砦から出土したものである (Алексеев 1996)。アラゼヤ砦と呼ばれるこの砦には、当地の住民からヤサク (毛皮による税) を徴収するために派遣されたコサック兵が駐留していた。

報告書によれば、全長 82mm、環状部の直径 33～35mm とのこと。展示では、振動弁が折れた状態で分離して、枠の腕部の中央に配置されているが、実測図 (fig. 74) では、振動弁は根元では折れてはおらず、先端に近い部分から先の 2/5 程度が失われている。稜線が環状部でも通っているのかどうかは、何とも言えないが、少なくとも現代のホムスのように平らに成型されてはいない。

アナトーリイ アレクセイエフは報告書で、コサック兵が現地のサハ人から入手した可能性を述べているが、筆者は、ヨーロッパ・ロシアからもたらされた可能性も否定できないと考える (次項 25. も参照)。サハ人の居住地域における最も古い口琴がこの17世紀の遺物で、他には19世紀以降のものしか発見されていない現状では、「サハの口琴はヨーロッパ・ロシアからもたらされた」というような、「世界一の口琴好き」を自任するサハ人が聞いたら激怒するような極論も成り立ち得る。もちろん、地理的に近い極東地方や、南のモンゴルの口琴との関連も、丁寧に検証する必要はあり、今後あらゆる観点からの情報収集が不可欠である。

25. ロシア連邦ヤマロ - ネネツ自治管区 2

Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia 2 [127, 128]

地理的にはアジアに位置している遺跡から発掘された、ヨーロッパ・ロシアの口琴の例が実際に報告されている (Визгалов, Пархимович 2008)¹⁰⁸。それが、18～19世紀の骨製の薄板状の口琴の発掘されたことで既出 (直川 2016) の、西シベリア、チュメニ州ヤマロ - ネネツ自治管区にある、マンガゼヤの遺跡で発見された口琴である。北部ハントイ人の骨製の薄板状の口琴が発掘されたシュルィシカル地区が、自治管区の西端にあるのに対し、マンガゼヤを擁するタズ地区 (タゾフスキイ地区) は、東北側にあり、カラ海とオ

ビ湾に面している。マンガゼヤは、タズ川が、オビ湾の東側にあるタゾフスカヤ湾に注ぐ河口に、環ウラル海上交易路の前哨地として、トボリスクのコサックによって1600年に建設された、貿易都市国家ともいえる町である。50年ほどの間繁栄し、2度の大火の後、1672年に放棄された。

この17世紀初頭の都市跡から、2001～2004年の発掘調査によって、2本 [127, 128] の湾曲状の金属製口琴が発掘されている。報告書によれば、1本 [127] は銅製 (fig. 75 右)、もう1本 [128] は鉄製 (同左) である (Визгалов, Пархимович 2008: 294)。

採寸は記述されていないが、図版中のスケールに基づけば、[127] が全長約51mm、最大幅約23mm程度、[128] が全長約35mm、最大幅約20mmといったところか。[127] は楕円形に近い環状部から、腕部にかけての角度を持つ部分の、片腕側がひしゃげたような形になっている。一方の [128] の環状部は、フラスコのような丸みを帯びた三角形。どちらも振動弁は失われている。

特徴的なのは、その環状部の断面で、バシコルトスタンの例 [112～116] と同じく、縦長の長方形となっている。この部分の採寸は、断面の高さ7-8mm、厚さ1.5mmと詳細に記されており、ここに、弁を取り付けるための7-9mm×2mmのホゾ穴が切られている、とされている (Визгалов, Пархимович 2008: 130)。

またヴィズガロフとパルヒモヴィチは、口琴が、船用のカスガイ、釘、靴、ドリル、長銃、ナイフの刃、アームチェア、鋏、千枚通し、縫い針などとともに、明らかに輸入されたものであるとしている (Визгалов, Пархимович 2008: 122)¹⁰⁹。

なお、この入植地の住民の音楽生活を伺わせる遺物は、口琴以外には3弦の擦弦楽器グドークのヘッド部の残片が二例あるのみとのこと (Визгалов, Пархимович 2008: 130)。

いずれにしても、このようなアジア地域におけるヨーロッパ出自の口琴の発掘例は、楽器の伝播の複雑さの貴重な実例である。この楽器の原産地であるはずのヨーロッパ・ロシア側での出土例の有無の検証や、形状的にもサイズの的にも共通点の多いバシコルトスタンの出土例との関り、そして大きさは異なるが上記サハ共和国内のコサック砦の出土例 [126] などを、改めて考え直す必要があると思われる。



fig. 75 ロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区マンガゼヤ出土の口琴。右から、[127][128]。(オリジナル図版は、環状部を上にした縦位置) ヴィズガロフ、パルヒモヴィチ 2008 より

26. 中国陝西省 3 Shaanxi, China 3 [129]

中国のほぼ中央に位置する陝西省では、紀元前20世紀の骨製の口琴が二十例以上 [57～79]、そして紀元前6世紀の口琴ケースと思われる墨書竹筒が一例 [14] 発掘されている。この陝西省の現在は省都西安となっている古都長安城から、湾曲状の鉄の口琴が出土しており、それが漢代のもの、と伝えられている模様である。

2019年9月に神木市で行われた国際シンポジウム「石峁皇城台考古新発見暨口簧国際

研究会」(直川 2020a: 44-47)の基調講演のひとつ、石峁遺跡の責任者である陝西省考古研究院院長の孫周勇先生による「早期口簧的考古發現與研究」の口頭発表中のスライドで紹介されたもので、詳細情報は未確認。

漢代の長安の上層社会で、口琴が流行したという文献資料もあり、それがこの口琴の年代確定の傍証に使われている旨の紹介もあった。漢代といえば、紀元前 206 年に建国された前漢から、新を経て後漢が滅びる紀元後 220 年まで。そのうち長安を首都としたのは、前漢の紀元前 206 ~ 209 年、後漢の紀元後 190 ~ 195 年であるが、いずれにせよ、この口琴の年代が正確なものであれば、現時点で最古の湾曲状口琴の出土例となり、紀元後 5 ~ 6 世紀のロシア沿海地方の例 [101] を遙かに遡る。更なる情報収集に努めたい。

27. ロシア連邦ブリヤート共和国 Republic of Buryatia, Russia [201]¹¹⁰

ソ連の考古学者・民族学者であり、シベリアとモンゴルの考古学的研究の先駆者でもあるオクラードニコフ(オクラドニコフ)は、『Древнее население Сибири и его культура(シベリアの古代の住民とその文化)』の中で、下記のように述べている(Окладников 1956: 106, l. 1-10)。

「セレンガ渓谷のザルビノ村付近の墓地のいくつかは、我々の領土(訳註:ソ連)におけるモンゴルの歴史の最初期段階と関連付け得る。これらの墓からは、貧しい遊牧民や狩猟民の生活をうかがい知ることができる。注目すべきは、これらの墓で、草原の民の特徴的な楽器であるモンゴルのフル хур のような口琴 варган が発見されたことである。女性たちは、羊の毛を刈るための鋏とともに『次の世界』へと送られた。マンズルカ川がレナ川に注ぐ河口の類似の墓では、13 世紀の文献に見られる、古代モンゴルに起源をもつ底が丸い土の容器が、女性たちの傍らで発見された。」(邦訳筆者)

ザルビノという村は、ブリヤート共和国の首都ウラン・ウデの南南西約 200km、モンゴル国境からは 20 ~ 30km 北の、セレンガ川西岸に位置している。バイカル湖からは、南に 100km ほど離れており、「マンズルカ川がレナ川に注ぐ河口」は、バイカル湖を挟んで北側に位置している。そのザルビノにある、何という遺跡から、何世紀頃の、どのようなタイプのどの程度のサイズの口琴が出土したのかは、現時点で全く不明である。しかしながら、文法的に単数形で表記されているので、1 例のみであるらしいことは判る。他にも、いくつかのヒントは感じとることができるように思われる。

まず楽器名「フル」は、モンゴル語で、馬頭琴と口琴を指すときに使われる「ホール хуур」の語¹¹¹の、発音を無視したロシア語への転記と、その際に母音をひとつ欠落させた誤記であろう。ここで、単に「口琴 варган が発見された」とするに留まらず、わざわざ「草原の民の特徴的な楽器であるモンゴルのフル(ホール)のような口琴」と長々と説明したのは、ロシア人読者にも理解可能な鉄製の湾曲状の口琴ではなく、「馴染みの薄い」薄板状の口琴であることを伝えようとした結果ではないだろうか。遺物そのもの、あるいは写真や実測図等を確認するまでは何とも言えず。あくまでも想像の域を出ないが、あながち的外れではないような気もする。

また、同じ文脈中で扱っている「マンズルカ川がレナ川に注ぐ河口の類似の墓で、13

世紀の文献に見られる形状の土器が見つかった」という言及は、ザルビノの遺跡そのものの年代を示す根拠としては頼りにならないが、いずれにせよ、モンゴル帝国の始まりは、テムジンがチンギスカンを名乗った1206年であることから、オクラードニコフがこの遺跡を12世紀末～13世紀のものと考えていた、と言うことはできるのではないだろうか¹¹²。

第5部のおわりに

次稿では、第3部で図版を紹介した3本の10世紀の日本の口琴の詳細情報確認を行い、アジアの発掘口琴のまとめと考察を行う予定である。

註：

- 95 内 [15] は欠番。詳細は、直川 2018: 64 註73。
- 96 北京市延慶区出土の口琴 [02～05] の素材の問題については、直川 2016: 61 参照。
- 97 ただし [81] は西周（紀元前 1100 年頃～紀元前 771 年）から戦国時代（紀元前 5 世紀～紀元前 221 年）にかけての夏家店上層文化（紀元前 1100～500 年頃）の遺跡としかわかっていない。
- 98 2 本以上発掘されている可能性あり（直川 2016: 65）。
- 99 原文では、cm で表記。
- 100 情報を提供してくださった埼玉県埋蔵文化財調査事業団の渡辺清志氏、実見を許してくださった木更津市教育育委員会の酒巻忠史氏、保存処理を行い、実見の機会を与えてくださった株式会社東都文化財保存研究所の菅野真広氏に感謝する。なお、渡辺氏は実測図を報告書に提供しており、また埼玉県内の三例などとの比較を行うとともに、今後の類例の発見を促す独自の考察を発表されている（渡辺 2020）。
- 101 この出土品の存在を知ったのは、トゥヴァ共和国の国際ホーメイ（喉歌）センター長クイルグイスの著書『Тайна тувинского горлового пения（トゥヴァの喉歌の秘密）』（Кыргыз 2013: 20）によってであった。その記述の出典である報告書（Кузнецов 2005）と実物の写真の入手に当たっては、バスクローヴヌィ氏の手を煩わせた。
- 102 直川 2020a, p. 51 参照。
- 103 ローベルト ザグレッヂーノフ（1932.12.16-2016.3.1）は、バシコルトスタンを代表する口琴奏者・発明口琴製作者（直川 2005: 64-71）。彼の生地アズィケエヴォ村は、メチェトリンスキイ地区にある。
- 104 実際には、オクラードニコフが記述しているブリヤート共和国の発掘口琴（後述 [201]）に関する情報を求めての会見であった。オクラードニコフと面識があったというクバリョーフ氏だが、当該のブリヤートの口琴については情報を持ち合わせないとのこと。関連する遺物として見せていただいたのが、このアルタイの湾曲状の口琴であった。

- 105 ヴィリュイスキイ地区は、今でも口琴製作者や鍛冶師が多く住み、また著名な口琴奏者を輩出する土地である。
- 106 他にも、鍛冶師が作った 3.5kg の鉄の丸棒が見つかったとのこと (Аржаков 2014: 24)。これがどのような物なのか、工業製品であるのかも機会を見て確認したい。
- 107 同博物館にある「考古学的に発掘された」というロシア語解説書を伴う展示品に関しては、直川 2020b: 50 参照。この例は、実際には発掘品ではなく、廃屋で発見されたものであることが確認できている。
- 108 この情報を知ったのは、2020 年 6 月に亡くなったイルクーツクの口琴奏者・研究者 ヴラヂーミル マールコフのインターネットサイト「Русский варгань」によってであった (Марков 2009-16)。
- 109 マンガゼヤからの発掘品は、モスクワの赤の広場近くにあるロシア国立歴史博物館に所蔵・展示されている。口琴もここに所蔵されていると思われるが、未確認 (展示はされていない)。ノヴゴロド出土の紀元後 13 ~ 14 世紀の湾曲状の鉄製口琴は展示されている。
- 110 薄板状 (A タイプ) の口琴であるのか、湾曲状 (B タイプ) のものであるのか情報不足で判断できないものは、200 番台とする。註 69 (直川 2018: 63) も参照。
- 111 口琴を表す語として、「口の楽器」を意味するアマン ホール аман хуур、「舌の楽器」を意味するヘル ホール хэл хуур、「竹の口琴」を意味するホルサン ホール хулсан хуур、「骨の口琴」ヤサン ホール ясан хуур、「鉄の口琴」トゥムル ホール төмөр хуур などがある。また、馬頭琴は、「馬の楽器」モリン ホール морин хуур である。楽器全般を指し示す場合は、フグジム хөгжим という別の単語を用いるのが一般的 (西村 2020: 330)。
- 112 オクラードニコフは、後の文献『История Сибири (シベリアの歴史)』では、ツングース語系の諸民族に共通する文化要素の一つとして、狩猟前の祈りの儀礼や頭飾りの装飾の円盤などとともに、口琴を挙げている (Окладников 1968: 206)。

参考文献：

Алексеев, Анатолий.

1996 Первые русские поселения XVII-XVIII вв. на северо-востоке Якутии. Федеральное государственное бюджетное учреждение науки Институт археологии и этнографии Сибирского отделения Российской академии наук.

Аржаков, Николай.

2014 Былыргы быдбаһыктаах дьыллартан.. Саха боотурун сэбэ-сэбиргэлэ. «Бичик». (『祖先の知られざる秘密…サハの英雄の鎧』).

平野, 雅之 編.

1988 一千葉県木更津市一 花山遺跡. 財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第 38 集.

Кузнецов, Николай.

2005 Есаульская курганная группа. Кузнецкая старина. Вып. 7. Изд-во «Кузнецкая крепость». p. 46-76.

Кыргыз. Зоя.

2013 Тайна тувинского горлового пения. Международный научный центр «Хоомей» Республика Тыва.

Марков, Владимир.

2009-16 Русский варгань. <http://varganist.ru/2.html> (参照 2021-01-20) .

西村, 幹也.

2000 モンゴルの口琴 一馬、鹿、白鳥のラプソディー ー. 日本民俗音楽研究所紀要 第1号. p. 329-347.

Окладников, А. П.

1956 Древнее население Сибири и его культура. Левин М.Г., Потапов Л.П. (ред.) Народы Сибири. Издательство АН СССР. p. 21-107.

1968 История Сибири. Издательство «Наука».

酒巻, 忠史.

2020 花山遺跡出土の鉄製口琴について. 木更津市文化財調査集報 24. p. 22-24.

直川, 礼緒.

2005 口琴のひびく世界. 日本口琴協会.

2012 サハの口琴ホムスの現在. 北海道立北方民族博物館 第27回特別展図録 東シベリア・サハ 永久凍土の大地に生きる. p. 46-53.

2016 アジアの発掘口琴チェックリスト(1): 薄板状の口琴(1). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要. vol.5. p. 57-70.

2017 アジアの発掘口琴チェックリスト(2): 薄板状の口琴(2). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要. vol. 6. p. 57-68.

2018 アジアの発掘口琴チェックリスト(3): 薄板状の口琴(3)と湾曲状の口琴(1). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要. vol. 7. p. 55-66.

2020a アジアの発掘口琴チェックリスト(4): 薄板状の口琴(4)と湾曲状の口琴(2). 伝統と創造 東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要. vol. 9. p. 41-56.

2020b 世界最古? 北日本海を挟む湾曲型金属口琴文化. 日本民俗音楽研究所紀要 第1号. p. 42-51.

Визгалов, Г. П., Пархимович, С. Г.

2008 Мангазея: новые археологические исследования (материалы 2001-2004 гг.). «Магеллан».

渡辺, 清志.

2020 木更津市花山遺跡出土の鉄製口琴について. 研究紀要 第34号. 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団. p. 39-42.

In this fifth part of the successive articles, section 20a complements information about the newly-operated preservation of the bow-shaped iron Jew's harp from Hanayama site, Kisarazu City, Chiba Prefecture, Japan (9th century A.D.). Section 21 discusses the example from the Kemerovo Oblast in South Siberia, Russia (7-8th century A.D.). It is followed by sections 22-24 that discuss examples from Bashkortostan, Altai and Sakha - Turkic Republics in Russia (16-20th centuries A.D.). The section 25 introduces two examples from Mangazeya, a trade colony (17th century A.D.) in Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, the westernmost part of Asia in Russia, which are considered to be imported from European Russia. The unconfirmed examples from Chang'an, Shaanxi Province, China (3rd century B.C. - 2nd century A.D.?) and Republic of Buryatia, Russia (13th century A.D.?) are also discussed in the sections 26-27.

(本学附属民族音楽研究所講師、日本口琴協会代表)